



統合診療棟がついに 来年5月開院

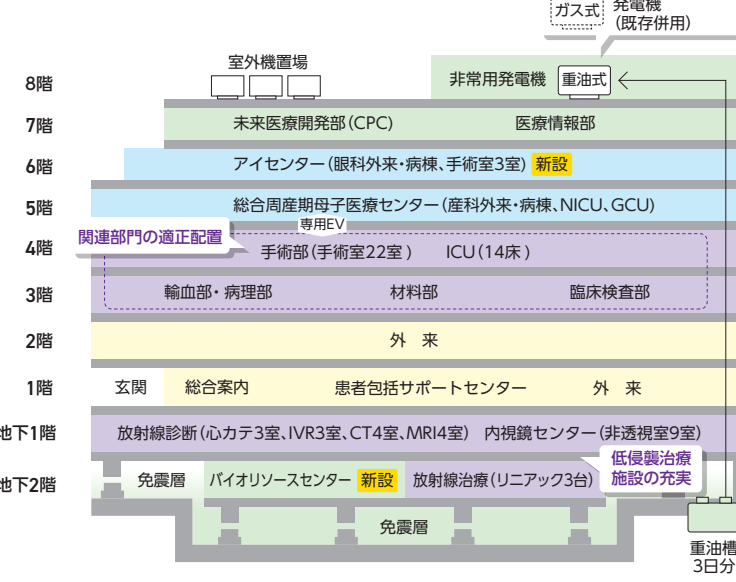
本院はインテリジェントホスピタルを掲げ、中之島にあった医学部とともに1993年に福島から吹田に移転してきました。それから30年が経ち、建物の老朽化等により、新機能の拡充ができないことから、本院の再開発事業を進めています。再開発のコンセプトは、「Future ability 待ち遠しくなる未来へ。」です。Future(未来)とAbility(能力)を組み合わせた造語となっています。

高度 安全 快適 を実現

2025年1月末日竣工、同年5月7日に開院を予定しており、その後の再開発事業は、既存の外来・中央診療棟の一部を解体し、新病棟を整備する予定です。統合診療棟は、外来・中央診療棟の北側に整備しており、地上8階、地下2階建て、延床面積68570㎡の棟であり、既存の外来・中央診療棟の機能の大半を移転し、新たな機能も備えます。また、接続通路を設け、既存病棟への動線を

本院では2013年度から再開発計画が開始し、現病棟の北側に「統合診療棟」という名称の新棟を建設中です。新棟には、中央診療機能、外来機能及び一部病棟機能を移転し、2025年5月7日に開院を予定しています。

統合診療棟フロア図 ※2024年9月時点



各フロアが有する機能を細かく見ていきますと、地下2階は、バイオリソースセンターと放射線治療の機能を有します。バイオリソースセンターは新設の機能であり、生物遺伝資源を高品質に保存・管理すること、ゲノム医療の臨床提供に寄与します。放射線治療は、リニアック装置を現有の2台から3台に拡充します。地下1階は、心臓カテーテル・IVR、放射線診断、内視鏡センター、材料部の機能を有します。心臓カテーテル室およびIVR室は、将来対応を含め、それぞれ現有の2室から3室に拡充します。内視鏡センターの非透視室は、現有の6室から9室に拡充します。

各フロアに新機能

確保しています。超高齢化社会への対応、本院の役割でもある超急性期医療、最先端医療をより提供できるよう、特に手術室、低侵襲治療施設等の中央診療機能を強化しています。また、アイセンター、総合周産期母子医療センターは、外来、手術室、治療室、病棟を全てフロアに集約し、機能強化、ハイボリューム化を図っています。さらに、患者包括サポートセンターを拡充し、地域からの紹介を通じて入院から退院後まで一貫したサポートができるよう地域連携強化を図ることに加え、より多くの患者さんを受け入れるために外来診察室数も増やしています。

地上1階は、医事課、患者包括サポートセンター、各科診察室等の機能を有します。診察室の規格を統一・拡張し、フレキシブルな使用が可能となっています。地上2階は、1階と同様、各科診察室等の機能を有します。内科系の処置室については、中央処置室に機能が集約されます。地上3階は、臨床検査部、輸血部、材料部、病理部の機能を有します。地上4階は、手術部、ICU、術前外来の機能を有します。手術室は、現有の21室から25室に拡充し、25室のうち3室は6階アイセンター内に整備されます。ICUは、現有の29床から34床に拡充し、統合診療棟に14床、既存病棟に20床となります。

新 診療科長等ごあいさつ



● 漢方内科長
はぎはら けいすけ
萩原 圭祐

多くの患者さんにご迷惑をおかけいたしました。10月より漢方内科科長に再任いたしました。漢方は、みなさんに備わるレジリエンス(回復力)をみちびき、心と体を回復させていきます。漢方内科では、今後も多くの患者さんの健康回復の手助けに取り組んでいきたいと思っています。引き続きよろしくお願い申し上げます。(令和6年10月1日就任)

高度救命救急センター EICU が大規模リニューアル



高度救命救急センターの重症治療室(EICU)が9ヶ月半の大規模改修を経て最新仕様に生まれ変わりました。「もしも」の時の日本屈指の最後の砦がますます充実します。

であり、それを達成するためには多くの組織がそれぞれの立場で尽力されています。そのような中で、阪大病院がすべきことは、よりよい医療を提供し、健康的な生活を守ることにあります。私たちは、良質な医療は、「高度」であるとともに「安全」であり、さらに「快適」でなければならないと考えています。高度で安全な医療は、健康な生活を守ることにあります。私たちは、良質な医療は、「高度」であるとともに「安全」であり、さらに「快適」でなければならないと考えています。高度で安全な医療は、健康な生活を守ることにあります。

阪大病院 NEWS

No. 96 号

OSAKA UNIVERSITY
HOSPITAL



2024(令和6)年10月25日発行

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所/〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-15
TEL / 06-6879-5111(代表)

QRコードから本院ホームページをご覧ください



<https://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp>

禁転載(この紙面は再生紙を使っています)

マスク着用のお願い



病院再開発基金へのご寄附のお願い

本院は、良質な医療を提供すると共に、医療人の育成と医療の発展に貢献するという使命を果たすべく、令和7年春の運用開始を目指し病院再開発事業を行っています。本事業には大学病院でしかできない臨床医学研究・開発など将来の医療に必要な部門の整備も含まれています。

診療機能・未来への医学の研究開発機能のさらなる充実を図るため、今般、「大阪大学医学部附属病院再開発基金」を、大阪大学未来基金に立ち上げました。再開発のコンセプトは、「Futureability待ち遠しくなる未来へ。」です。何卒、本事業の趣旨にご賛同いただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。▼詳しくはこちらをご覧ください

大阪大学
未来基金



2025年(令和7年)スケジュール

日	月	火	水	木	金	土
4/20	21	22	23	24	25	26
通常診療						
27	28	29	30	5/1	2	3
移転準備のため休診						
4	5	6	7	8	9	10
みどりの日	こどもの日	振替休日	通常診療			

※入院患者さんへの面会を制限させていただく場合がございます。

統合診療棟アクセスMAP



統合診療棟への移転に際し、正面玄関位置が変更となります
統合診療棟へのご来院の際は、統合診療棟正面玄関よりご入館ください

このたび、本院の外来・中央診療棟は新棟「統合診療棟」に移転することとなりました。移転に伴う引越作業のため2025年4月28日から5月2日の間、一般外来を休診とさせていただきます。現在の正面玄関(外来・中央診療棟)は、4月25日まで利用可能ですが、移転期間中4月28日から5月2日は、出入口の利用制限を行います。5月7日から、現在(外来・中央診療棟)の正面玄関は封鎖し、新棟(統合診療棟)正面玄関を開放します。皆さまにはご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



ホスピタル
ミニ・ニュース
PHOTO TOPICS

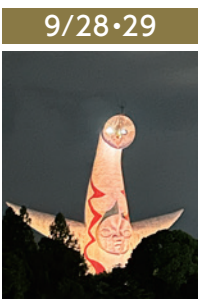


付き添い生活応援の
ご支援をいただきました



認定NPO法人キープ・ママ・スマイリングより「付き添い生活応援バックライト」のご支援があり、医師をはじめ病棟スタッフで心を込めてお届けしました。特に長期ご入院に伴う付き添いや緊急入院でご不安な日々を余儀なくされた方々にとって、「こういった温かなご支援を頂戴できることは、心の支えになる」と大変喜んでいただけました。このたびはご支援をありがとうございました。

★ 太陽の塔が金色に!! ★



世界的な小児がん啓発のための「グローバルゴールドセブテンバーキャンペーン」の一環として、太陽の塔がライトアップされました。入院中の患児や付き添い者に光のエールを送っていただきました!

阪大病院がんサロンの
第30回 開催します



がん相談支援室では、がん患者さん、ご家族を対象に12月20日に管理栄養士による「がん治療中の食事と栄養」についての講演会を開催します。「具体的でわかりやすい」「レシピが参考になった」などのお声をいただき毎年大変人気の講演会です。ぜひご参加ください。

国公立大学附属病院
医療安全セミナーを開催

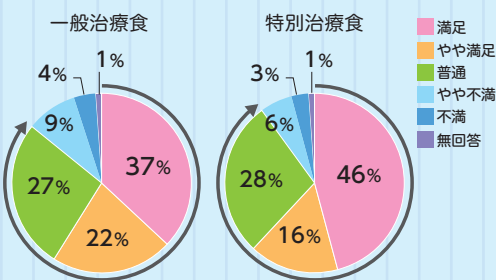


6月6日に「令和6年度国公立大学附属病院医療安全セミナー(文部科学省後援)」をオンラインで開催しました。文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室の永田昭浩室長ら17名を講師に迎え、全国の大学病院、官公庁、企業等から、医師、看護師、薬剤師、事務職員ら計825名の参加がありました。

今回のプログラムでは、働き方改革下で安全な医療を継続するための円滑な診療情報の共有方法、薬剤師の専門性を活かしたタスクシェア/シフトの推進、日常臨床業務や緊急時に「職種や部署の境界を越えた協働」を実現するための理論や実践、医療への患者参加、質改善の研究手法等が紹介されました。

また、近年、急務となっているサイバーインシデント対策について、被害を経験した医療機関から貴重な教訓の共有が行われました。参加者からは「最新の情報を得ることができた」「ITリスクに対するBCPの重要性が理解できた」等の意見が多数寄せられ、好評のうちに終了しました。

病院食アンケート
食事の満足度



入院患者さんを対象に病院食アンケートを実施しました。食事の満足度については、一般治療食では86%、特別治療食では90%の方から『満足・やや満足・普通』と回答いただきました。特別治療食の方へ「朝食に食べたいメニュー」をうかがったところ、「卵料理」のリクエストが多く寄せられたため、スクランブルエッグ等の新メニューを追加しました。また、「毎食のメニューを楽しみにしている」「退院後の参考にします」等の嬉しい感想もありました。今後も「おいしい、自宅でも作りたい」と思っていたけるような食事を目指して取り組んでまいります。

結果報告

野々村病院長おすすめ
夏の中華御膳



- メニュー (一例)
- 黒酢豚
 - 点心
 - チンゲン菜の中華和え
 - 御飯
 - 杏仁豆腐

今回のおすすめ御膳は、病院食では頻度が少ない中華料理をテーマに、野々村祝夫病院長からの酢豚、点心、杏仁豆腐といったリクエストを取り入れて入院患者さんにお届けしました。特に酢豚は普段使わない黒酢を使うことで、まるやかでより本格的な味に仕上げました。患者さんから「久しぶりの中華で嬉しかった」「酢豚がいつもと違ってよかった」「杏仁豆腐が食べやすかった」などたくさんのご感想をいただきました。また、病院長の写真と直筆のメッセージを添えたカードにも「嬉しかった、飾っています」と嬉しいお声をいただきました。

病理診断科

患者さんの適切な治療には適切な診断が必要です。病理診断科では、治療方針決定のため患者さんから採取された検体について、顕微鏡を用いて精度高く観察し病名を診断しています。顕微鏡で適切に診断するためには肉眼診断が大切で、毎日提出された組織検体を丁寧に病理医が肉眼観察し、顕微鏡観察に必要な病変を同定しています。阪大病院病理診断科では現在15名の病理医が所属しており、このうち11名が専門医のライセンスを有しています。病理専門

医は全国で2000名あまりと少ないにも関わらず、本院では多くの病理専門医が日夜診断に従事しています。また、組織検体と比較して侵襲の少ない細胞診検体の場合、病理医が診断する前に細胞検査士が予め確認していますが、資格をもった細胞検査士が8名所属しており、病理専門医とタッグを組んでいます。現在、組織診、細胞診をあわせて年間24000件程度を診断しています。

近年実装化されたがんゲノム医療でも病理診断は重要な役割を果たします。がんゲノム医療では、がん細胞のDNAやRNAを得てその異常を調べますが、検体中に腫瘍がほとんど存在しなければ異常を検出できず、検体中ほどの程度腫瘍細胞が存在するかなど多数の情報が必要です。また病理検体を固定する時に用いられるホルマリンは一般にDNAやRNAの質を低下させるため、適切な固定ががんゲノム医療の成否を決めます。このため、がんゲノム医療に供する検体の質保証も病理医に求められています。

日々、多くの検体を扱っていることから、検体の取り扱いについては特に神経を使っており、当科ではバーコード管理システムを導入し、検体の取違いを防ぐ仕組みを構築しています。様々な操作を自動で行える状況を整えており、できるだけヒューマンエラーを防ぐ努力をしています。精度管理でも高い基準が求められており、ISO15189の国際認証を受けています。

また本院では臓器移植を行っている関係で、緊急性を要する標準作成がルーチンで求められています。そのため、受付から診断までを3時間で完結しています。そのために、行えるシステムも整えています。正確な病理診断を行うためには、臨床各科と緊密な情報共有が必要で、臨床各科とのカンファレンスを緊密に行い、一刻も早く正確な診断が患者さんのもとに届けられるように日夜努力しています。

脳卒中センター



24時間365日受け入れ

脳卒中は、大きく分けて血管が閉塞することで生じる脳梗塞と血管が破れることで生じる脳出血とくも膜下出血に分類されます。症状は脳卒中が生じる脳の部位によって異なりますが、突然の意識障害、半身の脱力、言語障害で発症されるケースが多いです。また、くも膜下出血に関しては高度の頭痛で発症されるケースが多いです。

脳卒中は発症後に症状が増悪することがあり、速やかな受診が必要です。そのため、脳卒中市民公開講座を開催し来場者に対して啓発活動を行

い、また、近隣の救急隊・消防隊と協力体制を強化しております。同時に若手医師の育成が欠かせませんので、医学生や研修医も含めて脳卒中中の急性期治療、特に超急性期の脳梗塞治療が大きく様変わりしました。超急性期脳梗塞の治療として2005年が日本で静注血栓溶解剤(r-tissue PA)治療が承認された年になりましたが、近年はカテーテルによる血栓回収療法が普及し、安全に非常に有効な治療が出来るようになりました。当センターにおきましても血栓回収療法を常時施行可能な体制作りを行っており、日本脳卒中学会からPSC(一次脳卒中センター)コア施設に認定されました。もちろん脳出血やくも膜下出血に対しても効果的な治療を行っております。

脳卒中は軽症であっても速やかな受診がその後の後遺症軽減に繋がりますので、脳卒中を疑う症状があれば速やかに救急車を呼び、脳卒中センターでの治療を受けて下さい。

脳卒中のスペシャリストが常時対応